

帰国報告書（和文）

世界展開力強化事業メキシコ共和国チャピング自治大学長期留学帰国報告書

地域環境科学部 生産環境工学科 4年 上野 円



（チャピング自治大学の中央入り口）

私はメキシコ合衆国チャピング自治大学に 2018 年 8 月から 1 年間長期留学を行ってきました。参加したプログラムは世界展開力強化事業であり、中南米で活躍できる人材育成を目的に国からの支援を受け東京農業大学が実施した留学プログラムです。

私はこの留学プログラムに参加するのは初めてではなく、メキシコ留学の 2 年前にペルー共和国への短期留学に参加した経験があります。

大学 2 年生だった私は “いつか海外に行ってみたい” と漠然とした希望を当時抱いており、東京農業大学で開催されていた留学説明会に足を運びました。その時、紹介されている様々なプログラムの中で一番心に残ったのは世界展開力強化事業の短期留学でした。書類選考と面接の後、私はペルー共和国ラ・モリーナ国立農業大学への短期留学に合格しました。

ペルー共和国短期留学プログラム内容としては、ペルー共和国首都リマにある提携大学を見学した後、中央高地のカハマルカ、アマゾンジャングル地帯のプカルパに行きそれぞれの生活や文化等に触れるものでした。首都のリマでは提携大学内で学生交流会が開かれ開催時期と重なっていた食の祭典などにも参加しペルーの文化を知りました。カハマルカでは、中央高地の歴史や鉱山業の振興に直接見て学びました。プカルパでは、カムカム農場行きアマゾン独特の自然環境の中を歩きペルーの雄大な自然資源に触れました。

私にとって初めての海外渡航でしたが、短期留学 2 週間にこれでもかと様々なことが詰め込まれていたこの短期留学で得られた経験は、長期留学を目指すには十分すぎる動機となりました。

そして 2 年後の 2018 年に私はペルーと同じ中南米圏のメキシコ共和国チャピング自治大学に長期留学行くことになりました。

チャピング自治大学はメキシコの首都メキシコシティから 1 時間ほどのテスココとい

う町にあります。標高が 2000m 越えの高地であるため朝晩は冷え込みますが、赤道に近いため日が強く昼になると体感温度が高くなり過ごしやすい町です。また、歴史的な建造物が幾つか見られ、スペイン侵略以前の遺跡では“王家の風呂”や植民地時代の絵画として“ディエゴ・リベラ”の名画などがあつたりします。町の中には大きめのショッピングモールやスーパーマーケット、ホームセンターなどもあり、治安もある程度安定しており、夜間以外の外出は特に注意は必要なく（それでも窃盗などはよく噂に聞きますが）幸いにも、私は留学期間中に被害を被ったことはありませんでした。

生活面においては、チャピngo自治大学に隣接する *Colonia de profesores*（直訳：教員宿舎）に一棟三部屋、一部屋につき二人が割り当てられ計 6 人でシェアハウスのように暮らしていました。ここには、シャワーやキッチンが共用でガス代は自己負担でしたが家賃、電気と水道代は大学側が負担してくれました。私の暮らしていた棟に関しては、話し合いでガス代および自力で契約した Wify は割り勘となり月の支払いは食費を除き 3000 円程度であったと記憶しています。食事に関しても学生食堂があり、私の場合は月 2 万円程度で食べることができました。

人間関係においては、私自身多くの方々に助けられました。しかし、身近で最も多かった問題もまた人間関係でした。部屋を 2 名で共有する関係上、個人のスペースがなくなり互いのストレスがたまる事があります。それだけなら大きな問題は起こらないと思いますが、一部同居人のカップルが部屋を占領してしまいかなり大きな問題になった事があります。そういった文化なのだろうか？と、傍目に疑問を持っていましたが結果を見るに、単純に生活を共にする上での最低限のマナーがなっていなかったようです。

その他、夜間の騒音など色々な事がありました。結果的に生活においては概ね楽しい事のほうが多かった様に感じます。留学生が集まりキャンプに出かけたり、庭でバーベキューをしたり、人数がいれば危険は少ないので気心の知れた友人達と町に踊りに行ったりなどして遊びました。勿論、鼻持ちならない事も幾らかありましたが、お互いがオープンに過ごす事で生活が楽しくなる事も沢山あったと記憶しています。

学習面において苦心したことは言葉の違いに関する事でした。基本的なスペイン語会話については日本にいる間に学習済みでしたが、日常生活から講義に至るまですべてがスペイン語に変わってしまうことは予想以上に苦しいものでした。何より、教授の方々に英語が通じず講義内容や宿題の確認が取れないなど留学開始当初は講義自体何について話しているのか理解するだけでも大変な事でした。しかし、それについてもクラスメートの多大な協力や先生方の助けによって何とか乗り越えていくことができました。

また、苦しいことばかりではなく楽しい経験もいくつもすることができました。特に大学の講義の一環で参加した *Viaje de estudio*（講義旅行）では驚かされることばかりでした。

内容としては、メキシコ南部にあるユカタン半島に行き事前に調査したものと現場の状況とを比較検討するものなのですが、期間はすごく長い。半月間も大学が所有しているバスを使って行うというものでした。この講義旅行を通して、時間をかけていることはあり多く

のものを聞きすることができました。その中でも特に印象に残っているのが、ジャングル奥地の村に行ったことです。この村では昔ながらのはちみつ作りが産業となっており、経済状況や暮らしなどについて聞き込み調査を行っていました。



(マヤ語の残る村にて)

そこで驚いたことは古代マヤ文明の言葉が日常会話として使われていたことです。これは、村にある学校にお邪魔した際に知ったことで、子供たちはここでスペイン語の勉強をしていました。学校の休み時間に子供たちと仲良くなり遊びながら、言葉を教えてもらったのはとても良い思い出です。また、後日友人から聞いた話によるとメキシコは現地語が根強く残っている地域は地方に行くほど多いとのことでした。探してみると現地語とスペイン語のバイリンガルの方も大学内や地方の従業員の方々でかなり多く、日本では見られない国内の元言語という文化がまだ大事にされているというのは私にとってはとても驚きでした。

また、講義による受動的な活動だけでなく自発的な活動も行いました。その中で特に印象に残っている活動は、現地種苗会社への調査です。

7月に友人が働いている種苗会社に1週間ほど友人宅泊まり込みで調査に行きました。この会社はメキシコ有数の規模を持つ種苗会社で、主に国内外問わず生産者向けに花の苗を出荷、またはホームセンターに鉢花を多く出荷している会社でした。

主力商品となっているのがアメリカ向けへの **Geranio** 苗の輸出と、国内向けの **Noche Buena** 苗の二つです。

輸出向け製品で驚かされたことの一つは、施設がしっかりとしていたものだったことです。植物検疫の関係上、各ビニールハウスでの病虫害対策が細心の注意がはられ、温度調節機能も有していました。また輸出の関係上、商品である苗の健康状態にも注意が払われており、ダンボールにパッキングされる際も保冷剤が中に敷かれ輸送に用いるトラックに關しても温度調節機能を有する大型トラックを用いていました。

また国内市場向けの商品も興味が深いものばかりでした。

国内市場の主力商品は **Nocha buena** という花です。これはメキシコのクリスマスに欠かせない花で、様々な種類がありますが最も一般的なものは赤色のものがよくみかけます。12月まで苗を販売、クリスマス直前になれば大きな物をホームセンターに卸しています。その他、施設の更新も着々と進めており、蘭など栽培が比較的難しい種類の花も栽培及び販売を

開始するなど新しい事業の開拓を積極的に行っていました。

また従業員の管理職の方が指摘された問題点として、卸先がどうしても依存してしまう事があると、述べていました。例えば、国内市場の大きな苗の出荷は70パーセントをホームセンターに依存しているなどしており、そのため大手スーパーマーケットなどを対象に取引先を開拓する必要があるとのことでした。

従業員の方と直接職場について話す、管理者の方から今の会社の現状や今後の展望などを伺う事ができ、情報だけでは分からないことメキシコ種苗会社の実態を知ることができました。何より、知識として知っていても、実際に行ってみるとでは想定とは異なる事が多くとても勉強になりました。

もちろん生活や勉強にカツカツというわけではなく、1年間という留学期間の中で趣味にも時間を割くことができました。その中で特に時間をかけた趣味は中南米の古代文明の遺跡巡りでした。

そこで驚かされたのは、古代文明が有していた高度な技術の痕跡です。一見朽ちた石が積まれているだけの遺跡群ですが、細かなところまで観察していくとそれらが古代人の生活に深く関わっていたかがうかがい知れます。

すべての文明に共通していることですが、文明を維持する上で安定した農耕が必要となります。その上で重要になる事が、いつ、どこで、なにをどのように栽培するか、という事です。そのために、古代文明は天体観測技術を代表する学問分野を発展させカレンダーを作り季節の変化を正確に予測することによって計画的に農業を行うことができました。

代表的なものといえば、マチュピチュ遺跡です。天体観測施設ではないかと言われており遺跡群の中に夏至と冬至を測定する遺物を見ることができます。遺跡に隣接する土地に関しても傾斜地で効率的に貴重な水を使用するために石垣で作られた段々畑が広がっていました。また連作障害や種芋による栽培の危険性についてもなどの農業技術についての研究も進んでいたようで、多種多様なジャガイモやそのほかの作物など高地環境に適した存在が確認されています。

また中南米の多様な気候に適した作物を調べるために研究が行われていたとも、考えられています。これはモライという、階段状になった石垣が円形状のテラスとなっている遺跡で確認されています。一説では、テラスの石垣に使われている石の熱で段ごとに少しずつ気候が異なるように設定されている農業研究施設だったのではないかと、言われています。これにより、様々な気候条件で作物の研究が可能となり、全体で250種類の作物の研究が可能、とされています。

水利用技術においても目を見張るものがあります。

マチュピチュやモライに関しても、遺跡の隅々まで張り巡らされた水路や貯水システム、テラスへの複雑な灌漑システムなど興味深い遺跡ばかりですが、私が最も惹きつけられたのは“王の風呂”と呼ばれる遺跡です。端的に言えば、私にとっても最も身近で好きな遺跡です。



(王の風呂遺跡)

この遺跡はチャピngo自治大学から40分ほどの山の頂上にある遺跡です。水を貯める窪みが丁度風呂のように見えるため、“王の風呂”と呼ばれています。この施設は農業試験場もしくは植物園ではないか、と言われている遺跡です。今は半壊しているものが殆どですが、水路や貯水池の痕跡を数多く見ることができます。斜面には段々畑が残り、頂上には神殿らしき遺跡も残っています。

1年間遺跡の近くに暮らしていたので、自然とこの地域の人々はどのような気候の中暮らしていたのかがわかってきます。特徴として感じられたことは雨期と乾季がはっきりと分かれていることです。日本の夏に当たる時期には夕方にスコールのような雨が降り、冬に当たる乾季では月に2,3度しか雨が降りません。このような気候のため、水の効率的な利用は大きな問題であったのではないのでしょうか。そして、実際に遺跡の中には水路や貯水槽などの水利用技術の跡が多く見られます。このように、暮らしの中で得た実感と遺跡ができた理由を考えながら見て歩くのはなかなか面白いものがありました。

報告書の終わりに、私が留学生活全体を通して言えることは、“様々な幸運に恵まれていた”ということです。

クラスメート達と半月の間ともに過ごした修学旅行がどれほど楽しかったか。

友人宅で談笑しながらの食卓はどれほど心温まるものであったか。

現地種苗会社での調査はどれほどの方々に助けていただいたか。

旅先で得られた体験がどれだけ貴重なものであったか。

どれを挙げてもかけがえのないものばかりで、私の留学生活がどれだけ充実したものであったか、自分でも計り知ることもできません。

東京農業大学設立の立役者のお一人である榎本先生のお言葉“冒険は最良の師である”の御言葉の通り、私は毎日冒険のような日々を過ごしその最良の環境の中で様々なことを学ぶことができました。

この一連の世界展開力強化事業の留学プログラムを振り返り、私が思うことは“この留学プログラムは東京農業大学の理念と先達者の遺志を受け継ぎ体現しているのではないか”、ということです。つまり、東京農業大学が目指す“実学主義”と、この理念の草分けとなった本学創始者の御一人である榎本武明先生の言葉“冒険は最良の師である”の二つを実現されたものだ、と、今身をもって実感しています。それほどに東京農業大学の世界展開力強化事

業で得られた経験は素晴らしいものでした。

このような機会を設け様々なことを支援してくださった東京農業大学キャリアセンターをはじめとする方々、そして留学生活を支えてくださった友人たちに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。